

みめじみの

第32部



の め む ゐ

部 第32



著 道 光 谷 大

目 次

阿弥陀様と本願(三)	2
極楽の住人はどんな姿形?	3
極楽の人々はどんなパワーを 持っているのか?	6
神通力の使われ方	13
性善説・性悪説(二)	16
仏教での善悪	17
仏道に精進	18
性悪説による悪人	21
信心への入口	24
悪いことはすればするほど良い?	26
ご質問のまとめ	28
読者の頁	29
あとがき	31

阿弥陀様と本願 (三)

テレビなどで時々、「超能力」の番組があります。そんなとき、「本当かいな」と目を皿のようにして画面に食らいついで見るものです。スプーンを曲げる、見えない箱の中にあるものを当てる、不慮の死を遂げた人の死んだ場所を地図や景色を描いて教える、など様々です。だれも他人にはない特別のパワーは持ちたいもので、そのパワーは強けれ



昨年11月28日 御正忌報恩講でのご挨拶

ば強いほど、そしてそのパワーも何種類も持てると、魅力的です。今回のお話の後半はこの超能力です。

極楽の住人はどんな姿形？

阿弥陀様は、修行を重ねて成仏を期待することが無理な私たち凡夫のために、他の仏様にはない本願を起こされ、極楽という浄土を建立して私たちを迎えてくださる仏様です。しかし、いつも、本願、本願、とばかりは聞いているものの「いざ中身となると……」ということ、今まで二回に亘って、阿弥陀様がお出ましになるより前のことから、法蔵菩薩のご修行、阿弥陀様の極楽浄土の完成、そして阿弥陀様の本願の内容、極楽とはどんなところなのか、そこに住んでいる人はどんな人なのか、等々についてお話ししてきました。

そこで今回は、「極楽の住人はどんな人たちなのか、どんな生活をしてい

るのか」の続きで、どんな姿形をしているのかが、第三願と第四願です。

極樂の住人は「身体がこの世では考えられないほど美しく、しかも金色に光っている」というのです。極樂に往生すると、同時に成仏させてもらえるのですから、金色の身体というのは、覚った人から発せられる光のためなのでしよう。

第三願 設我得仏、せつがとくぶ 国中人天、こくちゅうにんてん 不悉真金色者、ふしつしんこんじきしや 不取正觉、ふしゆしょうがく

私が成仏するとき、私の国（極樂）の人たちの身体は皆金色でなかったならば、私は覚ったとは言いません。（悉皆金色の願）

第四願 設我得仏、せつがとくぶ 国中人天、こくちゅうにんてん 形色不同、ぎやうしきふどう 有好醜者、うこうしやうしや 不取正觉

私が成仏するとき、私の国（極樂）の人たちの姿が互いに違って、美しい人と醜い人とがいるようだったら、私は覚ったとは言いません。（無有好醜の願）

親鸞聖人は『浄土和讃』に、

顔容端正たぐひなし

極楽の方々の顔かたちは端正であること、他に比

べるものがない。

精微妙軀非人天

細かなところまで言いようもないほどにすぐれた

身体で、人間や天人とは比べものにならない。

虚無之身無極体

涅槃の境地から現れた身体だからである。

平等力を帰命せよ

心から阿弥陀仏の教えをたよっていきなさい。

と讃えておられます。

虚無||涅槃（覚りの境地）

無極||涅槃

平等力||阿弥陀仏（阿弥陀仏の本願力は往生した人に平等―物事のあり方が真理の立

場から見ればすべて同一であること―の覚りを得させてくださることから、

阿弥陀仏のことを平等力とも言つ）

極楽の人々はどんなパワーを持っているのか？

次の第五願から第十願は、極楽の住人の持っている「能力」です。

最近「超能力」という言葉のほうがよく使われますが、「神通力」といふことばを聞いたたり、使ったりされることがあるでしょう。しかし、それが



「常識では考えられない不思議な力」という意味であることはわかっていて、その「その中身は？」と聞かれると、如何でしょうか。「神通力」の「神」は神様のカミではなく

宣如上人（江戸初期…一六〇四―一五八）

幼くして（満十歳）本願寺第十三世法主となる。

教如上人の後を承け、東西に分かれた東本願寺の基礎を固める。

昨年十一月二十七日、三五〇回御忌を勤修。

「不思議」という意味です。それで「神通力」とは「人間の能力を超えた、不可思議で自在な能力」のことで、「神通」とか「通力」とも言います。そして、その中身は六種類あることから、六神通とも言われます。

六神通とは、次の六つです。

宿命通しゅくみょう…過去のことすべてわかる能力

天眼通てんげん…遠いところや未来のあらゆるものが見える能力

天耳通てんに…あらゆる言語や音声聞き取れる能力

他心通たしん…他人の心の中がすべてわかる能力

神足通じんそく…どこへでも自由に飛んで行ける能力

漏尽通ろうじん…煩惱が尽きて、自分でその状態がわかる能力

極楽の住人にはこの六神通をすべて身につけさせてやりたいとの阿弥陀様のお心が、第五願から第十願に誓われています。

第五願 設我得仏、国中人天、不識宿命、下至不知百千億那由他諸劫事者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人たちが宿命通を得ないで、一劫乃至百千億那由他劫の昔の事実を知らないようであれば、私は覺つたとは言いません。（宿命通の願）

那由他（または、那由多）|| 極めて大きな数の単位で、一〇の六〇乗（ゼロが六〇個）。一説に一〇の七二乗（塵劫記）。
下至〇〇 \parallel 一乃至〇〇。一から〇〇まで。

宿命通というのは、自分や他人の過去のありさまをすべて知ることのできる、つまり前世や、さらにその前、……のことまでもわかってしまう能力です。

第六願 設我得仏、国中人天、不得天眼、下至不見百千億那由他諸仏国者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人たちが天眼通を得ないで、一つの仏国乃至百千億那由他の諸仏の国を見ることができないようであれば、私は覺つたとは言いません。（天眼通の願）

天眼通というのは、千里眼と言われるように、普通の人の見ることの出来

ない遠いところが見えたり、また未来のあらゆるものを見通す能力で、時間と空間を超えて物が見える目を持っているということです。私たちの常識では視力が二・〇あれば「目のいい人」ですが、アフリカの広大な大自然の中に住んでいる人は視力が六・〇もあつたりするそうです。さらにもっと先に見えるのが千里眼です。

第七願 設我得仏、国中人天、不得天耳、下至聞百千億那由他諸仏所説、不悉受持者、

不取正覚

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人たちが天耳通を得ないで、一仏乃至百千億那由他の諸仏の説法を聞いて、悉く忘れないでいられないならば、私は覚つたとは言いません。（天耳通の願）

天耳通というのは、世界中のあらゆる言語や音声を聞き取ることのできる能力で、観音様が思い起こされます。観音様は正式には観世音菩薩と言つて

「世の中の音を観る」、つまり困っている人の声が聞こえて、苦しみを共にして下さる——これを「悲」と言います——お方です。

第八願 設我得仏、国中人天、不得見他心智、下至不知百千億那由他諸仏国中衆生心
念者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極樂）の人たちが他人の心を見る智慧（他心通）を得ないで、一つの仏国乃至百千億那由他の諸仏の国の中の衆生の思いを知らないようであれば、私は覺つたとは言いません。（他心通の願）

他心通というのは、他人の心の中をすべて読み取ることのできる能力で、「他心智」とも呼ばれます。自分が無欲であるときは人の心が読めてしまうという経験があります。「そう言えば私も……」と思われるでしょう。

第九願 設我得仏、国中人天、不得神足、於一念頃、下至不能超過百千億那由他諸仏国
者、不取正覺

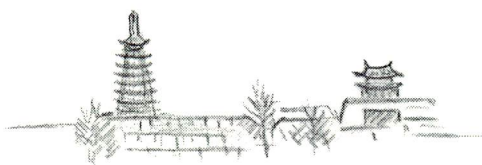
私が成仏するとき、私の国（極楽）の人たちが神足通を得ないで、一瞬間に一つの仏国乃至百千億那由他の諸仏の国を超え過ぎて自在に飛んで行くことができないならば、私は覚ったとは言いません。（神足通の願）

神足通は、行きたい所に自由に飛んで行くことのできる能力で、孫悟空が頭に浮かびます。『西遊記』の主人公・孫悟空は筋斗雲に乗って十万八千里を飛ぶ神通力を持っていました。また、修験道——山岳信仰、山伏、法螺貝と言えばイメージが湧くでしょう——の創始者・役行者は、伊豆大島から毎晩海上を歩いて富士山へ登って修行したという伝説があります。

第十願 設我得仏、国中人天、若起想念、貪計身者、不取正覚

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人たちが漏尽通を得ないで、いろいろな思いを起こして、自分の身に執着するようであれば、私は覚ったとは言いません。（漏尽通の願）

漏尽通は、煩惱の尽きた状態で、さらにその状態を自ら知ることのできる



孫 悟 空

能力です。「漏尽智」とも言います。漏とは煩惱のことで、煩惱は濃うみのよう
に絶えず流れ出るので「漏」とも言われます。

漏尽是煩惱が尽きたことで、これはそのまま「覺りを開いた」ということ
です。しかも、漏尽通という神通力は、その覺りを開いたことが自分でわか
るというのですから、まさに仏教の究極の目標に到達したことになります。

第十願本文の「自分の身に執着しない」とは、自分の持ち物は何でも――
必要なら命までも――捨てることができるということです。「命の次に大
切」などと言いますが、命までも捨てられるのが真の覺りの境地なのです。

神通力の使われ方

六つある神通力のうち、他の五神通は修行を積むことで身につけられるけ
れども、第十願の漏尽通だけは仏・菩薩でないに身につけられないとされて
います。

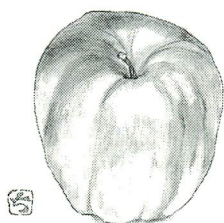
阿弥陀様の本願力に乗せていただいて極楽に往生したならば、だれでもそう簡単に身につくとは限らない五神通に加えて、凡夫には絶対に得られない漏尽通まで、まとめて自然に身につけてしまっているとは、何ともありがたいことです。

ところで、この五つの神通が「凡夫にでも身につけることができる」というのは、ちよつと考えてみるとまことに危ないことです。幻術（人の目をくらます術）とか妖術（人をまどわすあやしい術）、あるいは魔術と呼ばれるように、人を騙すのに悪用されるととんでもないことになり、私が冒頭で述べた超能力のことが思い出されます。第十願本文にある「自分の身に執着する者」とは、「結局は、何もかも自分の利得を基準に物事を行う危険性がある者」ですから、そのような者が修行して五神通のどれかでも獲得してそれを使い出すと、とんでもないことになります。

さきほどの孫悟空は、その神通力を使って天上界に押しかけて大暴れする

のですが、お釈迦様に鎮圧され、後に玄奘三蔵げんじょうさんぞうに助けられてそのお供をし、多くの困難を克服してインドから経典をもたらし、仏法興隆に尽くすこととなります。しかし、お釈迦様のおいでにならない今日、このような者が出てきたらたいへんです。

五神通が悪に使われるか、仏法のために使われるか、それを見張るのがこの漏尽通で、やはり六つ揃って「神通力」だと言えそうです。お浄土は、この六つの揃った人ばかりしかいないというのですから、やっぱりこの世とは違いますね。



〔以下次号〕

性善説・性悪説（二）

《編集部註》「性善説・性悪説（二）」は『第三十一部 読者の頁特集』質問一のお答えの続編です。

前部では、豊田租さんの「人間は性善説か？それとも性悪説か？」という質問に、仏教での考え方は、

仏教には性善説と性悪説の両方があり、仏教の中でも修行を積んでこの世で覺りを開く聖道門は性善説、修行を積むことのできない凡夫が来世に浄土に往生して覺りを開く浄土門は性悪説と言える。

と、とりあえずの結論をお話ししました。

ところが、仏教での善悪の基準について不十分であったので、それを補いながら、「悪人正機」と説かれている、いわゆる性悪説に属する浄土真宗の教えを我がものにしていただくまでのお話をいたしましょう。

仏教での善悪

仏教で言う善悪とは具体的に何なのかというのと、悪のほうは、十悪と、さらに重い悪とされる五逆、ほうぼう 謗法があります。

十悪は、殺生、せつしょう 偷盜、ちゆうとう 邪淫、じゃいん 妄語、もうご 綺語、きご 悪口、あつく 兩舌、りょうぜつ 貪欲、とんよく 瞋恚、しんに 愚癡、ぐち で、「仏道の妨げになる」ものです。また五逆とは、さらに重い五つの罪で、殺母、せつも 殺父、せつふ 殺阿羅漢、せつあらかん 出仏身血、しゅつぷつしんけつ（仏の体から血を出させる）、破和合僧、はわごうそう（教団の和を破る）です。そして、仏教で最も重い罪は謗法の罪です。謗法とは「ひ 誹謗正法」を略した言い方で、「仏の教えをそしめること」です。

一方、善については、まず十悪の反対の十善で、不殺生、ふせつしじう 不偷盜、ふちゆうとう 不妄語、ふもうご 不悪口、ふあつく 不兩舌、ふりょうぜつ 不綺語、ふきご 無貪、むとん 無瞋、むしん 正見、しょうけん（または不邪見）が挙げられます。これを戒として守る修行を「十善戒」と言います。

このほか、種々の戒律を守ること、心の散乱を防ぎ安静にさせる禪定を修

めることなど、仏道修行のすべてが善といわれるものです。浄土門では、前にお話しした定善、散善（『第五部』『第八部』参照）そして念仏が善であり、中でも他力の念仏が最高の善で、悪とは反対に「仏道に精進すること」です。

仏道に精進

では、「仏道に精進すること」が、なぜ善なのでしょうか。

私たちの日常での善悪の判断について、いま一度振り返ってみることにします。

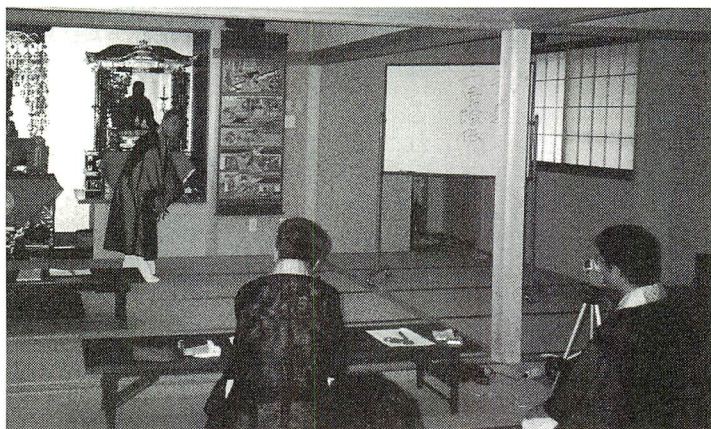
「罪に対して罰」という社会のルールを見ると、たとえば、人の物を盗んではいけない、人を殺してはいけない、……というルールは、盗まない、殺さない、という人としての義務と、盗まれない、殺されない、という人としての権利に基づいていると考えられます。そして「罪悪感」というのも、生まれてからの教育やしつけ、習慣の積み重ねが「常識」という形で身に付

くもので、平たく言えば、癖です。

これは、オオカミに育てられた子の話などを思い出すことで、いつそう実感が湧きます。人間の言葉がしゃべれないのはもちろん、人間社会の中に簡単には順応しなかった、といえます。この例によって、良きにつけ悪しきにつけ、私たちが生まれてから今日まで知らず知らずのうちに身につけてきたものの大きさに驚きます。

私たちはふだんは一定の善悪のわきま、えをもつて生活しているのですが、本当にこれらの良識はどこまで貫けるのでしょうか。つまり、「ふだん」ではない状況に陥ったとき、困ってくるのと勝手に今まで自分が守ってきた善悪の基準をゆるめたり、別の基準に取り替えたりはしていないのでしょうか。

よく「人間はもろいものだ」と言います。私たちは、その時その時の自分の正当化のために、自分の都合によるルール作りや変更をするのに忙しい生活をしている、と言えないでしょうか。このようなことを毎日繰り返し、実



大谷馨明研修会で絵解きの講習

際には他人に迷惑をかけていながらそのことに気づかず、その時その時は自分で納得乃至満足しているのですが、後になって長い目で見ると、ただただ迷走してきただけの自分を見出し、「私は今まで何をしてきたんだろう。これからも同じことなんだろうか。」と自問自答して溜息をつくのみです。

そこで、このような、同じ次元のところを行ったり来たりしていることをやめて、もっと完全な満足を得られる方法はないものか、という要求が生まれ、それに応えるのが仏教です。完全な満足とは、

このような迷いから抜け出すことで、つまり「覚り」を求めます。その覚りに向かうための習慣をつけることが「仏道に精進する」ことです。

先に述べたように、私たちは生まれてからこのかた今日まで、日常生活をするために意識的また無意識の中で、色々な習慣をつけてきました。これと同じように、覚りに向かうためにその習慣をつけることが「仏道に精進する」ことです。覚りという完全な満足を得られる方向にいつも向いていること、その癖をつけていくこと、その行い、営みがいわゆる「行」と言われるものです。

これは日常生活の中でいつも問題になる「善いか悪いか」ではなく「自分にとって大切なものは何か」を尋ね、それを求めていくことです。

性悪説による悪人

しかし、修行を積んでいける聖道門の人たち（いわゆる性善説）ならとも

かく、尋ねるのも求めていくのも、修行を積むことのできない凡夫（いわゆる性悪説）には、容易なことではありません。この意味から、修行を積むことのできない、仏道から離れよう、離れようとする者のことを「悪人」と呼び、浄土真宗はこの悪人のための教えです。

ですからまず、私たちは「念仏（南無阿弥陀仏）を称える」というこの簡単な一行を、その意味はわからなくても、日常生活の中で称えていくとともに、阿弥陀様の教えを聞いていくこと、浄土真宗はこれしかありません。

仏道に精進できない悪人でも、仏力により精進させられていく、させてもらえることになるのです。それは、そのように凡夫に仕向けていく力が働いているのであり、それが阿弥陀様の本願力です。仏道から逃げようとする者を捕まえてでも浄土に迎えてやろうという力です。「悪人正機」と言われるのはそのことで、悪人こそ阿弥陀様の本願の「お客さん」だという意味です。

さきに性悪説に属すると結論を出した浄土門について、なぜ性悪なのに成

仏できるようになるのかの秘密がこの辺にあります。

在家の仏教である浄土真宗では、日常の「善いか悪いか」の生活を離れることはできません。しかし、それと同時に、「往生・成仏という覚りの終着点に方向づけられている」ことを実感して安心することはできます。これはとりもなおさず、浄土真宗の信心と言われるものです。これが私たちの仏道です。

「善人なほもって往生をとぐ、いはんや悪人をや」

と、親鸞聖人が逆説を用いて悪人正機を説かれたのは、まことに有名です（『歎異鈔』『口伝鈔』）。

その要点は、次のようです。

「阿弥陀様の本願は、元々どんな行をやっても生死（生まれ変わり死に変わりしてとどまることがない、迷いの世界。輪廻^{りんね}）の苦しみを離れられない、私たちのような悪人・凡夫のために起こされた願であって、まさ

に阿弥陀様の本願力（仏力、他力）をたのみにする悪人を成仏させるためのものなのだ。一方、善人は自分に成仏する能力があると信じているからこそ、自力で善を積もうとするため、一心に阿弥陀様の本願力（他力、仏力）にたよる心が欠けている。だから他力をたのむ悪人がもつとも往生の資格があり、自力の人は阿弥陀様の本願になっていないのである。だから、「善人ですら往生する、まして悪人は……」と言ったのだ。自力の人とは、先に述べた性善説・性悪説で言うと、性善説によっている人です。

信心への入口

このように、悪人正機とは「阿弥陀様の側から見て、善人と悪人のどちらが本願になまっているのか、阿弥陀様がどちらを救済の対象（まじ目的）

とされているのか」と言えば、「それは悪人である」との教えです。

そこで、これに加えて「私は実際に悪人だ」と実感することになればどうでしょう。つまりこれは、私が阿弥陀様の願いとされる的であることに気づくことです。それによって、信心はでき上がってしまうのです。うんと平たく言えば、阿弥陀様と私が両思いになるということですよ。

このことについて、善導大師（親鸞聖人が特に敬われた七人の高僧の一人）は、
一、私は現に罪深い迷いの凡夫であ



讃仰歌（昨年11月28日 御正忌報恩講で大谷楽苑）

り、はかり知れぬ昔からいつも流転輪廻（生まれ変わり死に変わり）を繰り返し、これからも生死の迷いを出るチャンスがない。

二、彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂めとつてくださる。疑いもなく何も心配することなく、その本願力に乗ることによって、まちがいはなく往生できる。

と、つまり、「私は罪悪生死の凡夫である」そして同時に「阿弥陀様の本願力によって、私は間違いなく極楽に往生させてもらえる」という二つのことを深く信ずることが、信心の中身である、と教えてくださったのです。

悪いことはすればするほど良い？

ここで一つ注意すべきことがあります。

悪人正機の教えを取り違えて、「阿弥陀様は悪人ほど大事に思ってください。それなら、わざと悪いことをしてやれ。」という考え方に走ってはなら

ない、ということです。

これを「造悪無碍ぞうあくむげの異安心いあんじん」と言います。「悪を造っても（悪いことをしても）往生さわの障りとはならない」という意味ですが、さらにエスカレートして「悪いことはしたほうがいいのだ」というように発展したものです。小さい子どもが親の注意を引くために、わざといたずらをするのと似ているかも知れません。

「異安心」とは、「間違った信心」という意味です。これは教えに対する思い違いや、自分の都合に教えのほうを合わせようとした結果の産物です。造悪無碍は、何種類もある異安心の中の一つです。

実際に、そのような異説を唱える人たちが出てきて、その異説を「布教」したため、親鸞聖人はじめ本願寺の歴代は、これを是正するためたいそう苦労されました。

わざと悪いことをするのではなく、ありのままの自分の実体を見ることが

大切なのです。

ご質問のまとめ

前部では、仏教には性善説・性悪説の両方が用意されていると述べました。それで、自分が善人なのか悪人なのかは、「自分で決めるしかない」とも言いました。

これは、仏教が教えとして、どちらかに立つのではなく、両方の門が常に開いているということで、そのどちらの説によるかは、教えを實踐する私たち自身の決意次第だということです。つまり「人間は……」とか、「人というものは、一般に……」とかという他人事・一般論には何の意味もなく、一人ひとりが「あなたは性善説？それとも性悪説？」「聖者？凡夫？」との問の答えを出さねばならないのです。

たいへん意義深いご質問をいただき、ありがとうございます。

読者の頁

感想
意見

『第三十一部』に寄せて

富山県 河合 寛さん

このたび私の質問について詳細なるお答えをいただき有難うございました。往生の予約切符のお言葉により、すっきりした思いです。あらためて真宗聖典を開き、自然法爾章の因位、果位、そして獲得、名号を読み直しています。「一念多念文意より」を二十六頁に出されてある中で特に傍線の引かれてあるところは、何度も声を出して読み、私が聞かせてもらっていると感じています。

東京都 鈴木 健太郎さん

今回十頁からの「往生はいつ？」を興味深く拝見いたしました。十四頁の
闡如上人と真宗大谷派執行部の教義の違いの表は実にわかりやすく、「いつ、
どこで、成仏するのか」について真宗大谷派執行部に答えがないことが一目
瞭然です。

「この世が極楽であるはずがない」「成仏すれば煩惱はなくなる」という
点、この世で往生するわけではないことを明らかにしている重要な区別でき
る部分だと思います。

平成十九年報恩講に際して。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回は「読者の頁特集」で、お休みになっていた「阿弥陀様と本願」が再開され、今回は「その三」で、第三願から第十願の解説。光道台下は「六神通のうち最後の漏尽通以外は、いわゆる聖道門での修行で身につくこともある。しかし、漏尽通だけは仏・菩薩でないと身につけられない」と。さらに、六つ揃っての神通力であり、前の五つの神通が一人歩きすることの恐ろしさも説いて下さいました。

そして、前回の質疑応答「性善説？性悪説？」の続編で、有名な「悪人正機説」にまでつながるお話となりました。

こうした御親教を通して浄土門に触れる私たちは、神通の不思議に惑わされず、一心に阿弥陀様の本願を信じて行きたいものです。

読者のページを通じての光道台下とのキャッチボール。今後も「？」をそのままにせず、質疑や感想をどしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第32部

2008年3月5日 印刷

2008年3月10日 発行

定価 200円

著者 大谷光道

発行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印刷 (株)中外日報社



みめぐみの刊行委員会刊